

## もういいかい

北海道大学医師会  
札幌東徳洲会病院

いとう かずお  
伊藤 和夫

今年5月で77歳、喜寿を迎えた。札幌医大を卒業したのが昭和46年25歳の時であるからそれから52年、半世紀が経過したことになる。卒業後数か所での臨床研修を経て、20年近く勤務した北大を退職したのが50歳である。その後はJR札幌病院に10年間、恵佑会札幌病院に14年間勤務した。2020年から現在の札幌東徳洲会病院に勤務している。

卒業後数年間の臨床研修後は核医学専門医として放射線診断に従事してきた。同期の中には早世された人、退職された人もおり、そろそろ退職の年と考えている。医師の退職時期が何歳か、開業医と勤務医では異なるように思うが、3回の辞職を経験した後ではこの次は永久退職になることは間違いない。

TVを見てみると、一度も辞職や退職を経験したことのないコメンテーターなる人物が、退職後は旅行や趣味など、これまで時間がなくてできなかった自分のやりたいことやって余生を楽しんではいかがでしょうかなどと無責任な話をしている。

退職は自分の意思以外の周囲の状況、辞職は自分の意思で職を辞すことと記載されている。辞職は次の職場が決まっていたりすることがあるから、再就職までの期間はそれこそ自由に過ごす余裕がある。退職は再就職が無ければ翌日から日曜日が永遠に続くことになる。

それまで職場で過ごした1日8時間、週休2日では週40時間をどう自宅で過ごすか。毎日が日曜日、時間の制約はなく、好きなことができる。聞こえはすこぶる魅力的である。自分に当てはめて考えると、取り立てて趣味がないので、退職後は単に時間の制約がない日曜日が続くことになる。数か月もすると粗大ごみになるのは間違いない。

これまで20数か国を旅行した。家内からは海外旅行にはもう興味がないから行ききたかったら自分で行ってくださいと言われていた。

保険診療の区分では後期高齢者に属する。時間制限のない一人での旅行、あるいは海外生活は憧れではあっても常備薬の服用が必要な状況では3か月を超える旅行や海外生活には不安しかない。

趣味や旅行ではなく、もっとまじめに退職後もそれまでの経験を生かして何等かの社会活動に関与してはどうか。世話になった社会への恩返し。鶴の恩返しではあるまいし、そんな思いがあるのであれば今の職場で頑張ってみる方が多少なりとも役に立ちそうな気がする。

何か理由があって退職を渋ってきたわけではない。今の仕事が好きで受け入れてくれる施設があれば、仕事を続けたいとただ強く思っていた。そして自分の経験を受け入れてくれる施設があったことが最大の理由である。自分の選択した核医学は極めて限定された臨床医学の分野であり、それを利用できる施設もかなり限定されている。設備は整っているが常勤医がいない。たまたま状況に恵まれていた。

北大に勤務していた当時は新しい放射性医薬品の開発が目白押しであった。国立大学では金沢、京都大学に次いで3番目に医学講座が北大に新設され、臨床および研究の場が与えられたことは極めて幸運であった。JR札幌病院では腎機能の定量的評価法に関して再検討し、日本人にも適応できる算出式に関して報告した。計測を簡便化するために機械メーカーと共同して新装置も開発した。恵佑会札幌病院での勤務は新設されたPET施設の開設と同時であった。PET診断はそれまで経験がなく、かなりストレスを感じながらの診療であったが、周囲の優秀な臨床医に助けられ、食道癌を筆頭に多くの悪性疾患のPET検査を経験することができた。また、院内および他院の医師と協力して参考書「F-18 FDG PET/CT検査必携」を出版し、毎年海外での学会報告も行うことができた。充実した14年間であった。札幌東徳洲会病院にはPET、SPECT装置が設置されている。検査数は多くはなく、余裕をもって丁寧な読影をすることを心がけている。

核医学がPETにShiftした状況では、私が情熱を注いだSingle Photon核医学が衰退していくことは時代の流れであろう。これからの核医学がどのような方向に進むのか。悪性腫瘍の分子標的治療薬の効果予測や新しい内用療法の薬剤開発などは私の期待する分野である。

いつまで勤務医を続ける？

「トラは死して皮を留め、人は死して名を残す」

死んでからのことに興味はない。60歳の記憶力と200ヤードの飛距離を維持できれば今のところ万々歳である。次は傘寿でもう一度問うて見たい。

「もういいかい」「・・・？」